

そんな風には全く見えなかったかもしれないが、ネイティブな青森県民ではない、ということにずっと引け目を感じていた。青森が舞台の小説や、県内出身の作家さんは意外と多く、新刊のゲラ読みを頼まれるたびに、使われている方言の正確さや、描かれている風景に、確信を持って断ずることのできない歯がゆさがあったのだ。

私が生まれ育った福島県いわき市は、県の中でも太平洋側に位置している港町だ。言葉そのものが変わるわけではなく、語尾につく方言。はまっ子特有の気の強さ。会津といった山間の土地に比べると雪は少なく、温厚な気候が特徴で暮らしやすい。観光地としてはハワイアンズが有名だが、東北のハワイという謳い文句を聞いたことはないだろうか。

だからだろうか、八戸がなんだか自分に馴染むのは、青森県の中で同じように太平洋側に面した港町で、町がまとう空気が故郷に似ているからなのかもしれない。

そのネイティブではない、という「よそもの」という意識が薄れたのは八戸でブックフェスが行われることになり、そこに参加するようになってからだ。

青森の、八戸の人間なのだと、やっと認めてもらえたような気がしたのだ。

それまでは、青森県の外から見て、青森在住ということで声がかかっていたのが、初めて内側から誘われたのだ。お昼休みにひとりぼっちだった転校生に世話焼きなクラス委員の子が声をかけてくれた。やっと友達ができたような嬉しさだと言えはわかってもらえるだろうか。八戸というコミュニティの輪の中に入れたのだ！

八戸が「本のまち」というまちづくりの構想を掲げたことで、こどもたちに二千円のマイブッククーポンが配布されるなど、様々な施策が行われた。巷には本のイベントは溢れている。神保町しかり、福岡のブックオフしかり。だが、市が運営する本屋は、いまだかつてない試みで八戸にしかないものだ。中心街で行われた本のイベント「八戸ブックフェス」は市民・県民はもちろん他県の本好きの皆さんにも、もっと認知され、そして集客できる可能性を秘めた、伸びしろしかないイベントだと感じている。

正直、最初は市内に本屋が増える事には不安を感じていた。同じ商圈に店がひとつ増える。本来ならば書店としてはライバル、商売敵になるはずだ。だがそれはまったくの杞憂であった。盛り上がりそうな商材があればそれをいかに八戸として盛り立てていけるか知恵をしぼる。絞るところか

手を貸してくれさえする。八戸ブックセンターはどこまでいっても面倒見のよいクラス委員のままだった。

八戸ブックセンターのクラス委員のような仕事ぶりをこの五年間ずっと見守ってきた。このままずっと髪を染めたり、スカートを短くすることなく、憧れのクラス委員のままでいてほしい反面、ちょっと羽目を外したところも見てみたい気がするのだ。

遊び心のある企画展やイベントなど、殻を打ち破ったようなものに出会えることをひそかに期待している。

櫻井美怜 misato sakurai

成田本店みなと高台店

本のまち八戸ブックフェス(2018～)

「本で旅をしよう」(2020)など

成田本店みなと高台店副店長。文芸担当。
手作りのパネルを制作し、好きな本を徹底
して長く売る売り場づくりをしている。本の
帯に推薦コメントが掲載されることも多く、
大手出版社などからの信頼も厚い。

